Chapter 2　画家の声

津奈木に住み、感じ、描く。

津奈木町に滞在したことで、作品制作にどのような影響があったのか——。
町の印象や滞在中の思い出、こだわりなどを聞きました。

2019 大平 由香理 Yukari Ohira
2018 富田 直樹 Naoki Tomita
2017 加茂 昂 Akira Kamo
2016 幸田 千依 Chie Koda
2015 武内 明子 Akiko Takeuchi
2014 篠塚 聖哉 Seiya Shinotsuka








～6年間の軌跡～

妥協せず、自分と向き合う それが私の制作スタイル



2015 年参加
武内 明子さん
1983 年熊本県生まれ。絵画を主軸にしながらも陶板、日記、動画などさまざまな手法を用いた表現活動を行う。

展覧会が始まるまでは、制作のことでいっぱいで、余裕がありませんでした。それでも毎日、目に入る自然の緑や海、町の優しさに励まされました。その頃までは自分の内側と外の世界は別ものだと思っていたのですが、ある日を境に「つなぎ」が身体の中を通って出ていく感覚があって、とても印象に残っています。絵画は自分の中にあるもので、住んでいる場所の影響は受けないと思っていましたが、当時は描きながら津奈木町での出来事が浮かんできました。

この場所でまた発表する機会をいただけて、感謝しています。津奈木でお世話になった皆さんの顔が思い浮かびましたし、会えるのを楽しみにしています。


《ススのドローイング（停電の夜）》2015年

「描く」ことは私の生きる「要素」のひとつ

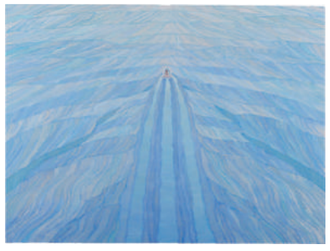


2016 年参加
幸田 千依さん
1983 年東京都生まれ。2017 年に若手作家の登竜門として 24 年目を迎える「VOCA 展 2017」で大賞の VOCA 賞を受賞。

それぞれの場所でしか出会えないもの、人、光、そしてそのときの心象。それを反映していくのが私のモットーです。私にとって「描く」ことは、ひとつの生きる要素。仕事や育児なども大切ですが、絵を描くことでしか体験できなかったり、感じられない思いがあります。4か月におよぶ「絵に成る暮らし」は数え切れない出会いや感動がありました。これまで7年ほど各地で滞在制作をしてきましたが、2016年の津奈木町での制作は一つの区切りとなりました。

翌年にVOCA展という美術展で大賞、そして結婚もしました。

ただいま12月からの展覧会に向けて新作を制作しています。息子を連れて皆さんと再会できることがとても楽しみです。


《あたらしい朝の丹》2016年

津奈木で経験したことは忘れられない大切な光景



2017 年参加
加茂 昂さん
1982 年東京都生まれ。社会が抱える問題とその中に存在する個人、双方に目を向けながら制作と問いに挑み続ける。

今回の滞在で決めていたことが、「スケッチ」を製作中に取り入れること。今までは自分で撮った写真などを参考にしながら絵を描いていました。写真と違って、描いているそばから変わっていく色や光、その時間が作品に反映されます。さらに毎日同じ場所同じ時間にスケッチしていると、物事のとらえ方に変化があったことに気づきました。

地元の皆さんはとても温かく、地元の子どもたちは毎週のように遊びに来てくれて感謝しています。滞在中に描いた「平国小学校と子供達の光景の肖像」や「海と子供の光景の肖像」は地元の子をモデルにしました。

津奈木で経験した全ては、私にとって切り離すことのできない大切な光景です。


《平国小学校と子供達の光景の肖像》2017 年

日々の暮らしの中の小さな出来事を描き出す



2018 年参加
富田 直樹さん
1983 年茨城県生まれ。厚塗りの油絵具を重ねる手法で描いた大都市の風景やフリーターの若者を描いたペインティングが注目を集める。

未来でも過去でもなく、町民が日常を生きる津奈木の「今」を描きました。小さな出来事や変化の上に今がある。この町に暮らす人々が日々見ている景色にこそ津奈木らしさがあると思います。

見ず知らずの田舎に住むのが初めてで不安でした。しかし、心細い気持ちを和ませてくれたのが津奈木の人たちとのふれあいでした。滞在中は魚や野菜などたくさんおすそわけをいただきました。私を一時的に住むよそ者としてではなく、ここに移り住んできたご近所さんのように接してくれて感謝しています。

私の目標は「本物の芸術作品を作る」。それが何かを問い続け、私だからこそ描ける作品を作っていきます。


《Night Road》2018 年

「私」の絵ではなく、「私たち」の絵を描きたい—



2019 年参加
大平 由香理さん
1988 年岐阜県生まれ。日本画を主軸にアートの可能性を探求する気鋭の若手作家として注目されている。

過去の滞在アーティストからつながれてきたバトンを引き継ぎ、お話をいただいてからプレッシャーとの戦いでしたが、皆さんの温かい応援が力になりました。

「ここでしか見られない、ここと関係が深い、ここで滞在したからこそ生まれた作品を作りたい」。特に心がけてきたことです。1人で描くと、100㌫私だけの作品になりますが、他の人が関わることで、『私たち』の作品を描きたいと思いました。丁寧に風景を見て、絵を描いて、個展を開かせてもらって、その作品達を町に残してもらえる。画家にとってこれ以上のない幸せでした。

現在、町の地域おこし協力隊員として活動しています。日々の暮らしの中で必要とされる芸術、共に寄り添える芸術をこれから気持ちを新たに津奈木で形にしていきます。


《華島》2019 年